

沖縄型金型

芽吹く技術

〈3〉

パソコンやテレビ、ビデオなどに搭載されるハードディスクドライブ(HDD)。映像保存機能は世界に広く普及する。複雑に組み合わされる部品の中で超精密な読み取り装置の部品を製造する企業が、うるま市の素形材産業向け賃貸工場に進出し、もう一つの事業の柱である金型製造の拠点を構える。岐阜県の大垣精工(上田勝弘社長)だ。HDD用超精密部品を製造する加工技術は世界に4社のみという。業界屈指の企業が沖縄で事業発展の可能性を探っ

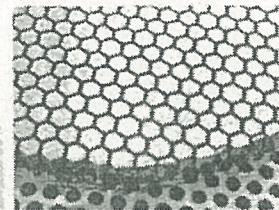
人材育成

「触媒用ハニカム金型」の製造で、加工状況を確認する大垣精工の社員。うるま市の素形材産業向け賃貸工場

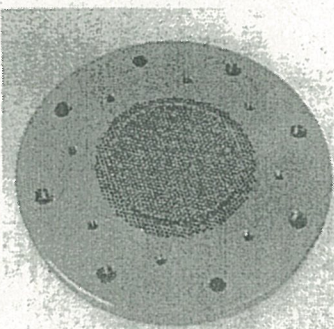


同社が沖縄工場を手掛けるハニカム(ミツバチの巣状に加工した製品)触媒用ハニカム金型。加工の精度は1ミクロン以下。加工の精度は1ミクロン以下。加工の精度は1ミクロン以下。

技術開発 企業も着目



大垣精工が手掛ける「触媒用ハニカム金型」。1ミクロン以下の精度で六角形状に加工されている(上は拡大写真)



以下と精密な細工が施されている。加工機操作など製作には相当の技術が求められる。この金型で押し出し加工し成形された触媒はディーゼル車に導入される。車面が排出する有害な一酸化炭素などを無害な二酸化炭素や水に変え

る動きがある。同金型の一部製造を沖縄工場が手掛け、多くを欧州に輸出。市場は拡大し需要は高まりつつある。ただ、先端機器を使用し製造する金型は、加工工程などプログラム入力や機器操作など難しい技術や知識が求められる。機械の性能が上がる中、同社は沖縄工場を人材育成の場にも位置付けている。金型技術研究センターなど関係者によると、国内の金型産業は従業員20人以下の中小規模の事業所が全体の88%を占める。社員教育に力を注ぐ余力が少ない。難度が高い金型を作る場合、熟練の責任者の腕に頼らざるを得ない。その上、早い納期に対応するため技術が必要な機械は常に稼働し、社員の技量を上げる機会を失っている状況がある。多くの企業が顧客のグロ

「超精密」で生き残る

バル化で厳しいコスト競争を余儀なくされる中、付加価値の高い金型作りを模索している。グローバル展開の中で生き抜くためにも人材の確保や技術開発は金型産業の大きな課題になっている。大垣精工はリスク分散に加え人材育成の観点で、企業と連携し人材育成を目指す金型技術研究センターの取り組みに着目し、沖縄進出のきっかけとなった。来年春にはセンターが育成する研修生を採用する予定だ。上田社長は海外は転職を繰り返す事例が多く、再雇用や再教育で効率が悪いとして「金型は全体的に考えれば日本で作る方がいい」と指摘。「超精密なものづくりをしていかないと日本は残っていかない」と強調した。(謝花史哲)(水一金曜掲載)